

基調講演：「災害の語り継ぎ研究」

河田恵昭（人と防災未来センター長）

災害を語り継ぐ際に伝える内容は、災害現場で得られた教訓や対応で得られた教訓、あるいは自然災害の発生の特徴、危機管理の手法、将来の予測など、いろいろあります。しかし、最も伝えなければならないことは、命の尊さであり、生きることの大切さです。

東日本大震災被災地の地区別の死亡率を見てみると、石巻市は3,777名が亡くなっていますが、死亡率は非常に高い。特に松原地区の被害はとても大きい。津波の高さは6メートル程度ですが、地区住民535名中93名が亡くなっている。家の外で亡くなった人が6名、家の中で亡くなった人が87名。女性の死者は62名で男性の倍です。年齢別で一番多いのが80歳代で32人。70歳代、60歳代と続いています。そのうち、ひとり住まいの老人は26人でした。

避難勧告を早く出し、その精度を上げて、こういう事例を見ると、人的被害を軽減することはとても難しい。我が国の高齢化社会はここまで進んでしまっています。東日本大震災の規模の津波が東海、東南海、南海地方で起きれば、間違いなく30万人は死んでいた。そういうことがわかります。東海地震では、静岡県への第一波は15分以内に来ます。防災研究者は東日本大震災の教訓を次に生かさないととんでもないことになるという共通の認識を持っています。

松原地区の高い死亡率の理由は、まず、津波被災の歴史がないこと。松林を伐採して造成された新興住宅地で、住民の大半は他地区からの移住者だったこと。そして、指定避難所の渡波小学校まで800メートルあったことです。区長さんが98歳のおばあさんに一緒に逃げまじょうと言ったら、おばあさんが、もういい、逃げないと言った。800メートルの距離を98歳のおばあさんに歩いて逃げろということがこの被災地では普通だったわけです。そして、津波が来たのが地震の約40分後でしたが、一番海岸に近い幼稚園は犠牲者がゼロだった。幼稚園の先生方が子ども達を車に乗せてすぐに避難したので、間に合ったのです。

17年前の阪神・淡路大震災の後、防災教育がとても大事だと言ってきました。命が尊いんだと。しかし、現実にはHow toものになっている。いきなり避難することから始まっている。これは、安全・安心の重要性が理解されていない、本当に形骸化してしまっている。「釜石の奇跡」とメディアが喧伝していますが、中学生が機転を利かせて逃げたのがよかったということではない。あの中学校は、この人と防災未来センター、兵庫県、毎日新聞社が共催する「ぼうさい甲子園」の2009、2010年優秀校で、2011年度は大賞を受賞しています。防災教育をきっちりやってきた学校なんです。そこを伝える必要があります。

そして、どこで語り継ぐのかということについて考えてみます。専用の施設の建設が必要だと私も思います。ただ、設置する地域、機能、運営主体、経費等の多くの課題があります。被災地が広いため、岩手、宮城、福島連携が必要ですが、難しそうです。

私は東日本大震災の復興構想会議のメンバーですが、会議でアーカイブズについての議論がありました。地震直後の津波の来襲過程は、ビデオ等、様々な形の情報が沢山残っています。その情報の収集について、複数の省庁から要求があり、復興構想会議の下の検討部会で調整しました。アメリカ合衆国では議会図書館が災害資料を集めているという前例もあったことから、国立国会図書館が、すべて収集することになっています。第3次補正予算で27億円計上しています。

さて、東日本大震災の教訓に、阪神・淡路大震災と全く共通のものがあります。日常防災の重要性と、連携の難しさです。岩手県、宮城県は、岩手・宮城内陸地震を始め、多くの地震を経験していますが、県と市町村との連携はありませんでした。

また、自助、共助、公助の割合について、平時は、自助が1で公助が7ですが、災害時は自助が7で公助が1になることが阪神・淡路大震災でわかった。これは東日本大震災にも当てはまります。

大阪で災害が起こったらどうするのか。活断層、上町断層帯、プレート境界の地震、津波、高潮氾濫、広域豪雨、ゲリラ豪雨、土砂災害、日本で一番危ないのが大阪です。足元がわかっていないのは、とても危険なことです。例えば、スーパー室戸台風での浸水予測地域についての記事が朝日新聞の一面に掲載されました。津波に限らず、大阪は200年に1回の雨で水没し、70年に1回の雨でも浸水します。

1854年の安政南海地震津波で大阪が浸水したことを示す絵図があり、「難波村水入り」と、今のミナミの地域が浸水したことがわかります。唯一、道頓堀を掘った土で盛り土した千日前だけが助かりました。また、1854年には東横堀川西側全域が浸水しています。そして、海遊館のあたりでは、この50年間に2.8メートル沈下するなど、大阪では、昭和60年までの50年間に地盤沈下が進行し、これまでと同じ氾濫でも被害が大きくなります。しかし、府民には伝わっていない。

そして、最近の災害では、不注意で亡くなったり、けがをする人が多い。2009年の台風18号の死者・負傷者のほとんどが不注意によるものでした。例えば、富士宮市では、暴風雨警報発令中に、神社にぎんなんを取りに行き、亡くなった人がいます。イチョウの大木が揺れて落ちてくるぎんなんを拾いに行った。その時、神社には16人の男性がいたそうです。自然の力を甘く見ることが常態化しており、死者・行方不明者・負傷者が増加しています。災害の教訓をどう生かしていくのかということは、実はとても難しいことです。

今年の豪雪の死者109人のうち70人、実に64%が65歳以上の男性でした。平成18年も23年も死者のうち65%が高齢の男性でした。東日本大震災でも60歳以上が60%を超え、65歳以上でも56%です。このように多くの高齢者が亡くなっているということは、本人だけではなく、地域の問題として対処しないと、死者を減らせないということが教訓としてわかります。地域活動を惹起しないと、これから大変なことになります。

震災で得た教訓、格言を語り継がなければいけない。例えば、今回の津波では、指定避難所に逃げるだけでは不十分で、時間があればもっと安全な高台に逃げるという教訓が

てきます。ハザードマップどおりに津波は起きません。地震と比べ、津波は教訓を一般化することが難しいため、語り継ぎに気をつけないと逆に大きな混乱を巻き起こす可能性があります。語り継ぎは無条件に被災者の言葉を後世に伝えるのではなく、吟味する必要があり、その作業は実はとても重要です。このようなフォーラムの場でも、教訓をそのまま伝えるのではなく、それを吟味する作業も必要です。

最後に、大きな危機は、必ず周辺部から中心部に向かって裂け目を開いていきます。これからのターゲットは首都直下であります。西の神戸で起こり、東の岩手、宮城、福島で起こり、残っているのは東京です。東海地震が起こっても、東京に大きな被害が出ます。私どもは心を引き締めて、次の災害に備えなければいけません。